

## バーミヤーン初期窟壁画の源流

岩井俊平

## はじめに

バーミヤーン石窟に描かれた仏教壁画の年代については、これまで様々に論じられてきた。近年では、文献史学、貨幣学、美術史学等の立場から、6世紀から8世紀、あるいは9世紀までという年代がほぼ定説となっている〔宮治1984; 2002 a; 桑山1985; 1990; Klimburg-Salter 1989〕。

一方、美術史学を中心としたこの編年に対し、まったく異なる方法である放射性炭素年代測定による年代が、2006年に独立行政法人文化財研究所（現在の独立行政法人国立文化財機構の東京文化財研究所・奈良文化財研究所）

と名古屋大学の年代測定総合研究センターによって提出された〔山内編2006 a〕（図1）。測定資料には、壁画を描く際のいわばキャンバスとなる壁土から採取した藁スサを用いており、この年代が壁画の描かれた年代を示す可能性が高い〔谷口2006〕。

測定の結果は、バーミヤーン仏教壁画（フォーラーディー石窟やカクラク石窟の壁画も含む）は5世紀後半から9世紀に継続的に描かれたことを示している。この年代は、これまでの編年で示されてきた年代の大枠とおおむね一致しており、大きな矛盾はないように見える。しかし、この測定によってもっとも古く5世紀後半から6世紀前半という年代を与えられたM窟（京都大学番号111窟）やJ窟群（同じく383-389窟）は、これまでの美術史的編年ではもっとも新しい（すなわち8世紀頃）と考えられている壁画を持つ石窟である。この点については、すでに宮治昭による詳しい論考があ

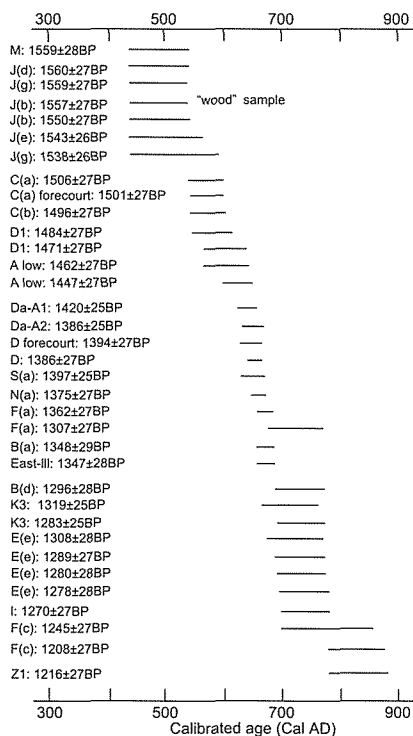


図1 バーミヤーン主窟壁画の放射性炭素年代測定結果

り [宮治 2006], 筆者もまた, この測定と中国キジル石窟でかつて行われた放射性炭素年代測定の結果とを比較する中で触れたことがある [岩井 2007]。

本稿は, この年代測定の結果を仮に受け入れ, 「バーミヤーン初期窟」たる M 窟および J 窟群に描かれた壁画が紀元 500 年頃に描かれたものであり, バーミヤーン仏教壁画の中でもっとも古いという仮説を, 美術史的な立場からも説明することが可能であるか否かを検証する, いわば試論である。これは同時に, 宮治が述べる「美術史学・考古学・歴史学など, 様々な関連分野の研究を連携させながら,  $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果と相互に交差させて, 歴史的事実に近づける作業を行うこと」という課題 [宮治 2006: 140] に対応する試みでもある。

なお, 本来こうした研究は, 壁画の「様式」や描かれる石窟の諸特徴, そして近年急速に研究が進んでいる壁画の技法・材料・構造等の知見 [山内編 2006 b; 谷口・岩井 2007] を総合して行われるべきであろう。しかし残念ながら, 対象とする石窟等のすべてにおいてこうした研究が行われているわけではないため, 今回は単に特徴的なモチーフの有無という比較にとどめざるを得なかった。

## I これまでのバーミヤーン仏教壁画の編年

バーミヤーン遺跡の本格的な学術研究は, フーシェ率いるフランス・アフガニスタン考古学調査団 (DAFA) によって開始された。20 世紀前半に行われた一連の調査の段階ですでに, 東西大仏龕や東大仏龕周辺窟といった主要な石窟の壁画は詳細に紹介されてきたが, 比較資料も少なく, 明確な年代の想定までには至っていない [Godard et al. 1928; Hackin et Carl 1933 など]。

その後, フランスのゼマルヤライ・タルズィーや, 名古屋大学隊, 成城大学隊, 京都大学隊といった日本の調査隊が相次いでバーミヤーン遺跡で調査を行い, 研究は飛躍的に進んだ [Tarzi 1977; 小寺他 1971; 樋口編 1983-84]。特に, 宮治昭による壁画の詳細な比較研究 [宮治 1977-78; 1984; 2002 a など] と, 桑山正進による中国文献と考古学資料を駆使した研究 [桑山 1984; 1985; 1990 など] により, バーミヤーンは 6 世紀中頃から発展し, その美術は少なくとも 8 世紀までは継続したという考えが大勢となるのである。

壁画そのものの編年については, ベンジャミン・ローランドによる研究 [Rowland 1974 など] や先述した宮治による詳細な編年研究, フランツ・グルネによる美術史学・宗教史的考察 [Grenet 1993], デボラ・クランバーグ＝サルターによる総合的な研究 [Klimburg-Salter 1989] により, 個々の壁画の美術史的な背景や相対編年が検討されてきた。その見解は論者によって大きく異なり, 一概にまとめることはできないが, 東西大仏龕の壁画をもっとも古い壁画と考え, 放射性炭素年代測定によってもっとも古い年代を与えられた M 窟および J 窟群の壁画を, 相対的に新しい時期の壁画としてきたのは, すべての研究者に共通する見解であった [宮治 2006: 137]。

その理由として挙げられるのは、後述する特殊な涅槃図の存在や定型化した千仏構成、交脚坐の弥勒菩薩が描かれるといった諸特徴である。これらは、バーミヤーン仏教壁画が形成されていく過程で徐々に整えられていく特徴であり、このセットが備わっているM窟やJ窟群の壁画はバーミヤーン仏教美術の中でも後期に属する、と考えるのは自然なことであろう。このため、これらの石窟の壁画がもっとも古いと考えるのには抵抗があることも事実である。

## II 放射性炭素年代の結果

こういった理由から、現在のところ、文化財研究所と名古屋大学年代測定総合研究センターによる放射性炭素年代測定の結果は受け入れがたいと考えている研究者が多いであろう。それは、5世紀後半から6世紀前半という絶対年代が古すぎるという点に加え、やはり上述したM窟とJ窟群の壁画がバーミヤーンにおける初期の壁画であるという点が問題となるからである。

絶対年代については、問題となる5世紀後半から6世紀前半までに対応する暦年代校正データセット（この測定の際はIntCal 98）の変化がフラットであるため、一つの<sup>14</sup>C年代に対して複数の暦年代が対応してしまい、誤差が大きくなってしまうという問題がある<sup>1)</sup>。しかし、相対年代について今回の測定結果をみると、一つの石窟から採取した複数の資料や、一つの石窟群から採取した複数の資料がほとんど同一の年代を示しており、その信憑性は非常に高いと考えられる [中村 2006]。したがって、今後の研究によって現在提示されている絶対年代が多少前後したとしても、その相対年代は変わらないはずである。こうしたことから、M窟およびJ窟群がバーミヤーン仏教石窟の中でもっとも古いという相対編年は、非常に可能性が高いものとして受け止める必要がある<sup>2)</sup>。

なお、破壊された東西大仏についても、制作する際に用いられたと考えられる木杭と縄を用いて放射性年代測定が試みられている。ドイツ隊が行った際の年代は東大仏が557 ± 15年、西大仏が601 ± 12年と測定された [ベツェット 2005]。同様の資料を用いて名古屋大

---

1) M窟およびJ窟群に次いで古い年代が与えられているC窟群の年代は、6世紀半ば頃で誤差も少ない。バーミヤーン石窟群が順次連続的に開鑿されたと仮定すると、M窟とJ窟群の年代は6世紀前半と考えるのが妥当であるかもしれない。

2) なお、「M窟およびJ窟群の壁画が、もともと存在していた古い壁土に描かれたものであるため、壁土から採取した試料は古い年代を示すのだ」という考えを完全に否定することはできない。しかし、バーミヤーンを含めた中央アジア各地の壁画では、描き直しをする場合には古い壁画の上から直接重ね描きをするか、新たな壁土を塗ってから描く場合がほとんどであるし、彩色層のみを剝して、古い壁土に壁画を描いた可能性についても、健全な「キャンバス」を得るのが難しいことからほぼ否定することができる [谷口 2006]。したがって本稿では、壁土の年代がすなわち壁画の年代であるという前提に立っている。

学で行われた測定では、東大仏が430-560年、西大仏が600-650年という年代が与えられた [中村2007]。両者の年代は限りなく近接しており、東大仏が6世紀前半から中頃に、西大仏が7世紀前半に造立された可能性が高い。これは壁画の年代とも一致しており、バーミヤーン最初期窟の年代が6世紀前後となる蓋然性は一層高まったといえることができる。

### Ⅲ M窟およびJ窟群の壁画

これまで述べてきたとおり、石窟個々の相対編年に関しては、これまでの美術史編年と放射性炭素年代測定による編年が矛盾しているように思われる。この矛盾を解決することが可能かどうかを検証するために、まずはM窟とJ窟群の壁画の特徴を略述しておきたい。

#### 1 M窟（京大111窟）

正方形のプランに平天井の小規模な石窟である。奥壁（北壁）に小仏龕があって、その内部および周辺の壁画が特によく残されていたが、内戦中にそのほとんどが失われてしまった。仏龕内中央には、三尊形式の壁画が描かれ、両脇侍の菩薩はそれぞれ異なる宝冠をかぶり、珠点で表現された臂釧などの装飾品をまとう（図2）。さらに仏龕の左右上方には、日神・月神の表現が認められる。北壁東側にも多くの壁画が残り、坐仏とその脇侍などが描かれる。

前壁（南壁）の東側には、中央アジア風の服装をした供養者が三人描かれているが、他の部分はほとんど剥落している。また、平天井全体が小仏の壁画で埋め尽くされる千仏構成となっていた（図3）。

なお、平天井の石窟で壁画が描かれているのは、バーミヤーンではこのM窟のみである。



図2 M窟仏龕の壁画



図3 M窟天井の千仏構成

## 2 J(d) 窟 (京大 388 窟)

正方形のプランにドーム天井で、スキ  
ンチ・アーチを持たない。入口のある南  
壁以外の側壁には、それぞれ三尊形式の  
仏画が描かれていたが、多くは残ってい  
ない。ドーム天井の天頂には、交脚坐で  
宝冠（おそらくは三面冠飾）をかぶり左  
手に水瓶を下げる弥勒菩薩が描かれ、天  
井下縁にそれを取り巻く坐仏列、その下  
の鼓胴部にも坐仏列が描かれる千仏構成  
となっている（図4）。さらに鼓胴部北  
側には、特徴的な涅槃図が描かれている。  
横臥する釈尊の枕元には摩耶夫人と考  
えられる女性 [宮治 1983]、足下には双足

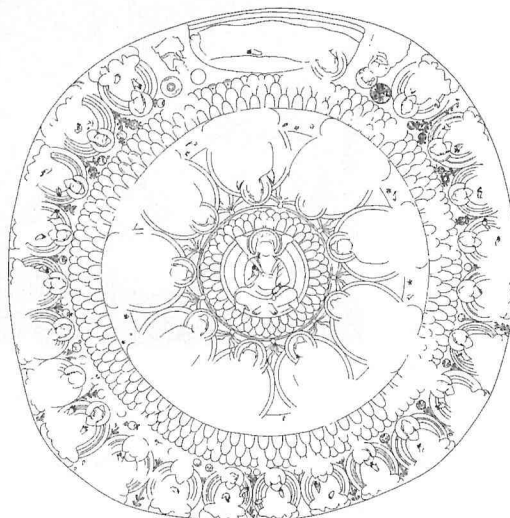


図4 J(d) 窟天井および鼓胴部の壁画描き起こし

礼拝する大迦葉がセットで描かれているが、この両者が必ず描かれるのがパーミヤーン涅槃図の特殊性である [宮治 1983; 1992]。この J(d) 窟の涅槃図の場合、さらに左上に日神が表現され、おそらく右上剥落部分には月神が描かれていたものと考えられる（図5）。

## 3 J(g) 窟 (京大 386 窟)

正方形のプランにドーム天井で、四隅にスキンチ・アーチを持つ。壁画のほとんどが剥落するか、あるいはスス状の黒色物質で覆われ、全体像を把握することはできない。しかし、ドーム天井の天頂に菩薩像、その周辺に坐仏列という構成だったらしいことがうかがわれる。

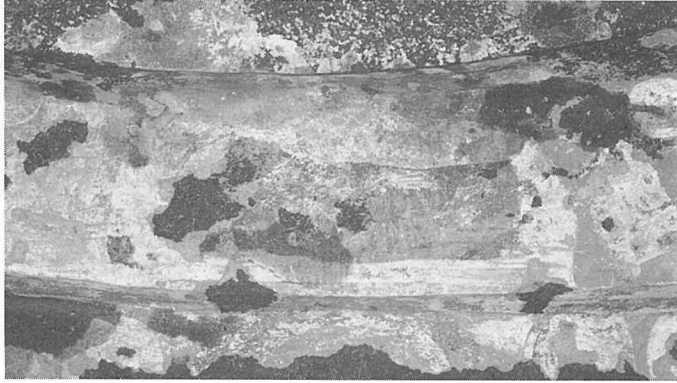


図5 J(d) 窟鼓胴部の涅漿図

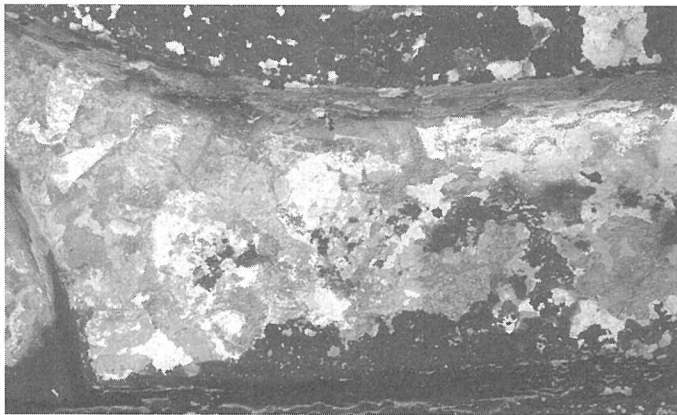


図6 J(g) 窟鼓胴部の涅漿図

また、鼓胴部南側（入口上方）には涅漿図が描かれ、やはり枕元に摩耶夫人と思われる女性が表現されているものの、足元の部分は剥落している（図6）。

なお、側壁にはほぞ穴が残されているため、窟内の荘厳には彩色塑像も併用されていたことがわかる。

#### 4 特徴の抽出

以上見てきたように、放射性炭素年代測定でもっとも古い年代が与えられた窟の壁画には、次のような特徴がみられた。

- ・特殊な涅漿図の存在（J(d) 窟, J(g) 窟）
- ・定型化した千仏構成の存在（M 窟, J(d) 窟, J(g) 窟）
- ・上記の涅漿図・千仏構成と、交脚坐の弥勒菩薩がともに描かれる（J(d) 窟, J(g) 窟?）
- ・日神・月神の存在（M 窟, J(d) 窟）

・中央アジア風の衣装の供養者の存在（M窟）

また、M窟の壁画とJ窟群のそれとの間には、様式上の大きな差異が認められる。特にM窟で認められる菩薩の冠式や珠点で表現される頸飾および臂釦などは、J窟群の壁画には一切見いだされない。M窟に認められるこれらの特徴は、パーミヤーン全体でも唯一のものであり、正方形・平天井という石窟構造とともに、M窟が特殊な存在であることを示している。

その一方で、これらの石窟の壁画に共通するモチーフとして、白い球状の蓮華文を挙げることができる（図7）。この文様は東大仏周辺窟の一つであるC窟群（京大164-166窟）

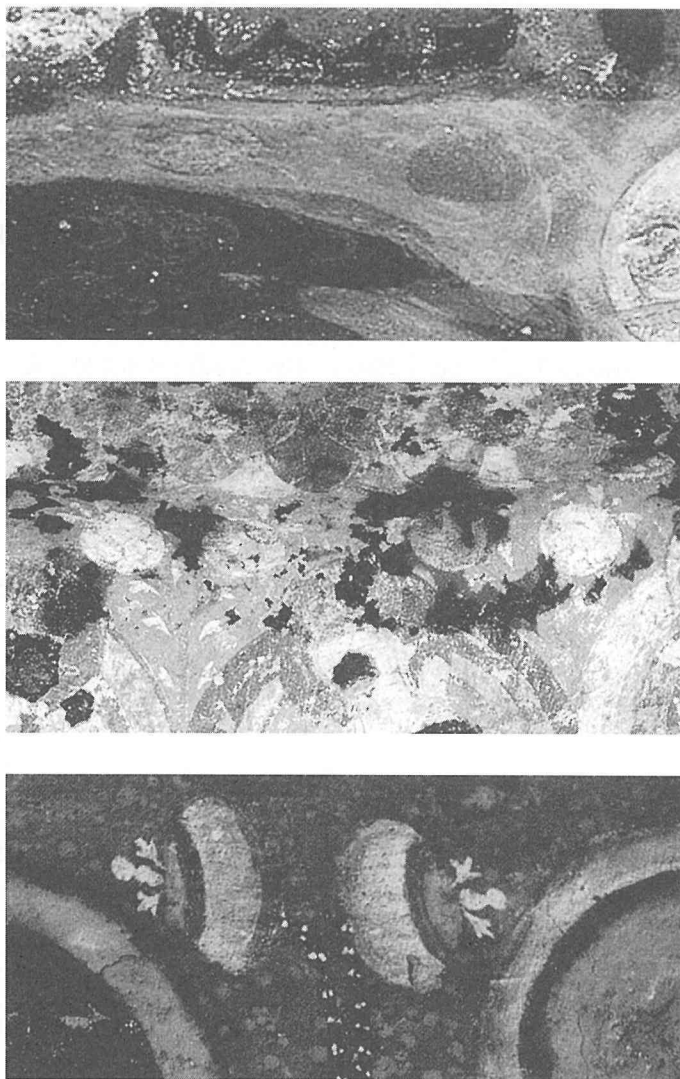


図7 パーミヤーン各窟の蓮華文様（上からM窟、J(d)窟、C(b)窟）

および A 下窟群（京大 129, 130 窟）とも同じもので、M, J, C, A の各窟群に何らかの関係があることを感じさせる。特に J 窟群と C 窟群に花文様など多くの共通点が認められることは、これまでの研究でも常に指摘されてきたが、今回の放射性炭素年代測定でも、C 窟群の年代が 6 世紀半ば頃、すなわち、J 窟群に次いで古い石窟群であるという結果が出ている。つまり、この両窟群に高い共通性があることは、美術史学からも年代測定からも裏付けられているのである。

#### IV 6 世紀前後の周辺地域の仏教美術

それでは、バーミヤーン初期窟の壁画に認められた諸特徴は、どこに起源を求めることが可能だろうか。周辺地域の同時代の美術様式を概観し、その源流を追及していきたい。

##### 1 トハリスターンおよびソグドの美術

当該期のトハリスターンおよびソグドの美術様式は不明な点が多い。ペンジケントなどのソグドの諸都市で壁画が描かれ始める時期であると考えられるが、その最初期の年代は漠然と 5 世紀頃とされるだけで、決定的な証拠はない。

また、トハリスターンの仏教遺跡は 4 世紀後半頃を境として衰退し、その後 7 世紀頃にふたたび盛況となる傾向があるが [岩井 2006]、本稿で問題とする 5 世紀後半から 6 世紀前半の時期は、まさにこの中間期に位置し、現段階の調査状況からバーミヤーンに影響を与え得る美術様式が存在していたかどうか明言することはできない。

ただし、6 世紀以後になって、ペンジケントの壁画にヒンドゥー教的なモチーフが登場することや、パルフ北方のディルベルジン・テベにおいてシヴァ・パールバティ像の壁画が描かれることなどから考えれば、バーミヤーンにおけるグプタ朝美術の影響の登場と軌を一にしている可能性が高い。近年では、こうしたグプタ朝美術の拡散がエフタルによる北西インド地域からソグド地域にかけての広域支配によってもたらされたと考える説が有力となっている [Grenet 2002; 影山 2006]。

##### 2 インド・グプタ朝の美術

この時期の中インド地域では、グプタ朝期に成立した美術様式が、各地に大きな影響を与えている。特に、アジャンター石窟後期の彫像および壁画がその代表と言えるものであろう（グプタ朝の美術については、肥塚 2000; 定金 2000 等を参照にした）。

バーミヤーン仏教壁画には、非常に多くのグプタ朝的な表現が認められる。特に西大仏龕の壁画と、それを模倣したと考えられる H(a)（京大 404）窟の壁画にその顕著な影響が認められる。具体的にいえば、菩薩の三曲法の表現、立体感を演出する隈取り、天女の官能的な表現などが挙げられる。先述したとおり、バーミヤーンにおいてもっとも古い壁画のひとつ



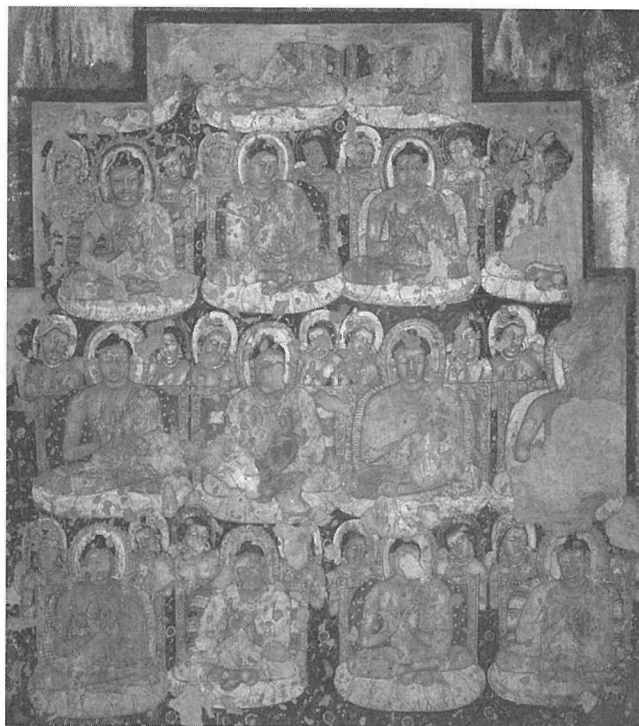


図8 アジャンター第2窟の千仏構成

つと漠然と考えられてきたのはこの西大仏龕の壁画であり、そのためにバーミヤーン仏教壁画の成立にグプタ朝の美術が強く関わっているととらえられてきた。

しかし、M窟およびJ窟群で認められる特徴である千仏構成や涅槃図像、さらに交脚坐で宝冠をかぶり水瓶を持つ菩薩といった図像は、このグプタ朝美術においては少数しか認められない。

まず千仏構成であるが、アジャンターにおいては、壁画および浮彫によっていくつかの千仏表現が認められる〔宮治 2002 b: 7-9〕(図8)。同時期の東インド、サールナートでも同様に認められるが、これらは基本的に「舎衛城の神変」の一場面を表現したものであり、単に小仏で空間を埋め尽くすバーミヤーンの千仏とは根本的に表現が異なっている。その年代についても、5世紀末から6世紀前半で、後述するように、遅くとも420年には空間を坐仏で埋める千仏構成が完成していた中国甘粛よりも新しい例ということになる。

次に涅槃図である。グプタ朝期、それまでインド内部ではほとんど作られることのなかった涅槃像が単独の礼拝対象としていくつか制作されるという事実はあるものの、その数は非常に少なく、宮治の研究によればポストグプタ朝まで含めても15例ほどだという〔宮治 1992: 186〕。たしかに、アジャンター第26窟に見られる巨大な涅槃像の存在は、涅槃に対する特別な信仰を表現するものとして無視できるものではないが、バーミヤーンにおいて登

場する定式化した特殊な涅槃図の祖形となりうるものではないことも明らかである。

最後に交脚坐で宝冠をかぶり水瓶を持つ菩薩である。そもそこの坐勢自体が、アジャンターやマトゥラーの仏教美術にほとんど見出されない。一方で、宝冠をかぶる菩薩、持水瓶の菩薩は当該期に広く認められ、アジャンターにおいては三山冠や三面頭飾のような、バーミヤーンおよび後述する中国西域と比較的似た宝冠をかぶる菩薩が出現し、弥勒菩薩と同定することが可能であるという [宮治 1992: 368-383]。しかし、このような菩薩が水瓶を持つ例はまったく知られておらず、バーミヤーンにおいて弥勒と同定されている交脚坐で宝冠をかぶり水瓶を持つ菩薩の祖形とは考えにくい。

このように、アジャンターをはじめとする代表的な例を見る限り、グプタ朝期の仏教美術が、バーミヤーン初期窟の壁画の起源となったことは考えにくい。さらに、仏伝やジャータカといった説話図を中心としたグプタ朝壁画の構成は、そもそも涅槃図以外の説話を一切持たないバーミヤーン壁画とは相容れないものである。

一方で、これらのグプタ朝期の美術様式の特徴は、西大仏龕、H(a)窟などで確かに認められるし、最近になって文化財研究所の調査で新たに発見されたN(a) (京大471)窟天井に描かれた唐草文と融合した動物図像も、アジャンターの壁画に直接的な祖形を求めることが可能である [山内 2006]。西大仏龕とN(a)窟は7世紀の年代が与えられており、H(a)窟の壁画が西大仏龕の壁画の影響下で描かれたものであれば、やはり7世紀以後の年代ということになる。

すなわち、バーミヤーンにおいてグプタ朝の影響が強く表れるのは7世紀頃ということになる。ただし、M窟とJ(d)窟に描かれる日神・月神の表現はグプタ朝の影響と考えられており、初期窟においてその影響がすでに認められるのも事実である。また、先述したソグド・トハリスターの美術におけるグプタ美術の影響は、遅くとも6世紀後半には認められるため、その影響の拡散についてはさらなる検討が必要であろう。

### 3 ガンダーラ・カーピシーの美術

ガンダーラおよびカーピシー地域で出土する片岩製の彫刻・浮き彫りといった仏教美術に関しては、すでに重厚な研究史が積み上げられており、広く中央アジア仏教美術全体の祖形であることが確認されている。したがってバーミヤーンの仏教美術にも、ガンダーラに起源すると考えられるモチーフが頻出する。特にカーピシーで出土する浮き彫りは、中央アジア美術との関連が深く、これまでも中国西域美術の直接的な祖形であろうと考えられてきた [宮治 1985: 55]。

まず千仏構成であるが、ガンダーラ・カーピシーを通じて浮き彫りの例が散見する。ただし、当然のことながらこれらの浮き彫りは仏伝の一場面を表すものであり、この千仏構成も「舎衛城の神変」を表した浮き彫りの中に認められる。その表現は多岐に渡っており、バーミヤーンのように定式化していない。

涅槃図も、仏伝の浮き彫りパネルとして非常に多く制作され、嘆き悲しむ衆生、横転する執金剛神、火界定に入るスバドラ、釈尊の双足を礼拝する大迦葉といった涅槃の美術的表現は、これらのガンダーラ浮き彫りを通して定型化したと考えられる。特にガンダーラ出土とされる涅槃図浮き彫りでは、涅槃に入る釈尊の枕元に女神の姿が表現され、バーミヤーンの特異な涅槃図との繋がりが十分に想定される。宮治は、この図像が中央アジア涅槃図の成立に重要な意味を持つことを指摘し、これはガンダーラでしばしば表現される「街の女神」で、バーミヤーンや敦煌隋代の涅槃図に表現される摩耶夫人とはその由来を区別している〔宮治 1992: 130-131〕。

一方、交脚坐の菩薩も非常に多く表現され、これらが水瓶を持つことも多い。この図像は弥勒菩薩に同定されており、バーミヤーンおよび中国西域で頻繁に認められる交脚坐弥勒菩薩の祖形と考えることが可能である。しかしながら、この交脚坐弥勒が宝冠をかぶる例は一切知られていない。かねてより、行者・修行者的な弥勒菩薩のイメージが、中央アジアにおいて王者としてのイメージに生まれ変わることが指摘されてきたが〔宮治 1992; 2002 a など〕、確かにそのような変化が、図像の上では認められるのである。しかし、その過程が具体的に図像から追えるわけではなく、あくまで当該期に翻訳・流行した経典の内容等から裏付けを取るしかないのが現状である。

以上のとおり、ガンダーラ・カーピシーでは、バーミヤーン初期窟壁画の祖形となりうる表現が多く認められ、その成立に大きな影響を与えたものと推測される。さらに中国西域の美術に関しても、このガンダーラとカーピシーの美術（特に後者）が祖形となっていることは確実である。

#### 4 敦煌および中国西域の美術

中国西域付近の美術研究で問題となるのは、その実年代である。特にバーミヤーン初期窟と関連が深いと考えられる石窟の年代については、いまだに多くの論者が自説を主張し、決着しているとは言い難い状況である。

本稿では、あくまでバーミヤーン初期窟との比較という観点から甘肅敦煌の莫高窟と、新疆クチャのキジル石窟を取り上げてその特徴を略述するが、それぞれの遺跡について大まかな年代観についてもやや詳しく触れておきたい。

##### ① 敦煌莫高窟

まず、敦煌莫高窟最初期窟の年代である。現存する最初期窟は、268窟、272窟、275窟の3窟で、敦煌研究院は北涼期（敦煌では421～439年）とする〔敦煌文物研究所編 1980-82〕。これに対し、北涼期よりも遡る西涼期（敦煌では400～421年）とする説〔王瀧 1988〕、これらが雲岡石窟の影響を受けて成立したもので、480年以降に下るとする説〔宿白 1993〕などがある。このうち宿白説は、中川原育子による批判的な翻訳によるとかなりの事実誤認があるようだが、門外漢である筆者にはその正否を判断することはできない。さらに275窟に

関しては、球＝三日月型冠飾の存在とそのサーサーン朝からの伝播時期とによって455年以降の成立とする説〔桑山1977〕、北壁に描かれた本生図がすべて445年訳出の『賢愚経』にみられるものであることから5世紀半ば以降に下げる説〔石松2005〕がある。

ここでこれらの学史をまとめ、確固たる編年を打ち立てることは筆者の力量をはるかに超えた作業であると同時に、紙幅もそれを許さない。しかし本稿でもっとも重要な部分は、どの説を採用しても、敦煌莫高窟の最初期窟群がパーミヤーンの最初期窟群よりも古いという事実である。たとえもっとも新しい年代の宿白説を採用したとしても、莫高窟の方が古いかほとんど同時ということになる<sup>3)</sup>。

そして、これらの最初期窟の美術を概観すると、宝冠（三面冠飾の場合もある）をかぶった交脚坐の弥勒菩薩が、壁画・塑像ともに非常に多く制作されていることがわかる

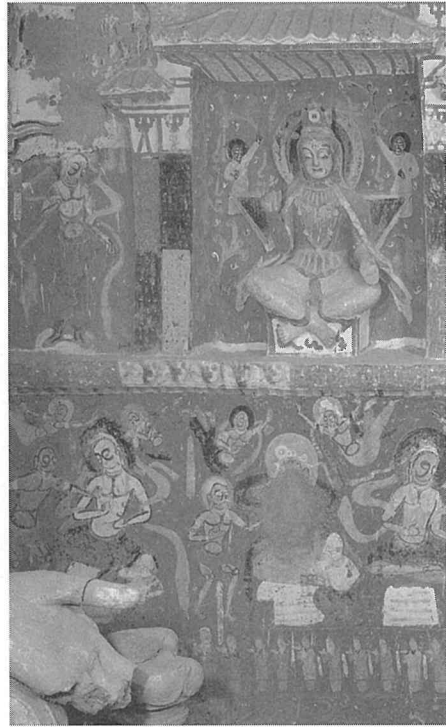


図9 敦煌莫高窟275窟の交脚坐菩薩

(図9)。菩薩の冠飾の一部には、先述したとおり、サーサーン朝の影響を強く受けたものが認められることも興味深い〔桑山1977〕。そしてこのようなタイプの菩薩像の流行が、460年以降の平城における雲崗石窟開鑿の際にも取り入れられているのである。

千仏構成についても、仏伝の文脈からは切り離された、壁を小仏で埋め尽くす壁画がこの段階で採用されており<sup>4)</sup>、年代的には確実にパーミヤーンを遡る例ということが出来る<sup>5)</sup>。

3) なお、現在敦煌莫高窟において敦煌研究院との共同研究を行っている東京文化財研究所が、これらの最初期窟から採取したスサヤ木材の資料を用いて放射性炭素年代測定を実施しており、その結果の公表が待たれる。

4) 敦煌から南東へ800kmほどにある炳靈寺石窟では、西秦の建弘元年(420年)の紀年を持つ第169窟において、小仏で空間を埋め尽くす定式化した千仏構成の壁画が確認できる。したがって、中国西方においては、定式化した千仏構成が5世紀初頭にすでに確立していたことができる。

5) また、莫高窟の最初期窟群に、パーミヤーンでは7世紀前後になってはじめて登場する方形組み上げ天井(いわゆるラテルネンデッケ天井)と類似する構造がすでに存在していることも興味深い。本来は木造建築の技法であるこのタイプの天井の起源や伝播経路・時期については不明な点が多く〔窪寺・岩出2006: 69-70〕、今後は壁画の様式とも併せて検討していくことが重要であろう。

なお、これらの最初期窟では涅槃の表現は認められないものの、ガンダーラ・カーピシー地域に起源すると考えられる説話表現が複数認められる。

## ② キジル石窟

クチャのキジル石窟の年代は、敦煌莫高窟ほど明確ではない。20世紀初頭以来のドイツ隊による研究の集大成とも言えるヴァルトシュミットによる編年 [Le Coq und Waldschmidt 1922-33] によれば、クチャ地方の壁画には第1～第3様式があり、それがこの数字の順に行われたという。その絶対年代については、石窟から発見されたブラフミー文字の書体から決定している。キジル石窟には、このうち第1様式と第2様式が存在し、この編年を的確に要約した宮治昭の研究 [宮治 1988] に従えば、キジル第1様式は500年頃、キジル第2様式は600年頃にはじまって、650年以降に続くものということになる。

一方、中国では宿白が石窟形式の分類から編年を行って第1段階から第3段階を設定し、絶対年代については1979年から81年にかけて北京大学で行われた放射性炭素年代測定の結果によって決定している。その報告 [宿白 1983] によれば、第1段階は310±80年から350±60年、第2段階は395±65年から465±65年、第3段階は545±75年から685年±65年である。

一見してわかるとおり、両者の間には絶対年代に関して非常に大きな意見の相違があり、いまだに決着が付いていない。しかし、ヴァルトシュミットらによって設定された壁画の様式区分は、それが年代差に置き換えられるかどうかは別にしても、明らかに存在している。宿白もその点は認めており、この二つの様式がキジル石窟内で平行して行われていたと主張している [宿白 1983]。

また、拙稿でも触れたとおり [岩井 2007: 100-101]、この段階での放射性炭素年代測定を、現在行われている加速器を用いた方法と直接比較することはできない。したがって現状では、キジル石窟の壁画は遅くとも6世紀初頭には描かれはじめていたと考えておくしかないだろう。

実際に壁画をみると、ドイツ隊が第1様式、第2様式と区分したいずれの様式についても、敦煌莫高窟やバーミヤーン初期窟の壁画とは趣を異にしていることがわかる。しかし、宝冠をかぶった交脚坐の菩薩の図像や、三面冠飾の表現、菩薩や天人の装飾品の表現など、一部のモチーフがバーミヤーン初期窟と関連性を持っている。さらにこれらのモチーフが、第77窟のような美術史編年でも中国側の編年でも古いとされる石窟において認められることは興味深い (図10)。

これに加えて、キジル石窟における仏教美術の大きな特徴として、ガンダーラ・カーピシーの特徴を引き継いだ豊富な説話表現を挙げることができる。さらにキジル石窟の場合、多くの説話表現から涅槃関連の図像を抽出し、それだけを別の場所に独立して描くようになるという過程が見て取れる [中野 1978; 宮治 1989]。この点は、バーミヤーン仏教美術に涅槃図以外の説話表現がまったく認められないことと関係する可能性が考えられる。



図10 キジル77窟の交脚坐菩薩

さらにキジル第2様式では、こうした涅槃関連図像が中心柱窟の奥の回廊部分に描かれ、回廊を出た正面上方、すなわち前壁の入口上部に交脚坐弥勒菩薩の兜率天説法図が描かれる場合が非常に多い。この点については、『観弥勒菩薩上生兜率天経』との関係等がすでに指摘されており〔宮治1989〕、バーミヤーン初期窟においてもこの両者がセットになって描かれているため、両遺跡の関係が深いことを改めてうかがわせる。しかし、バーミヤーンにおいてはキジルのような中心柱窟は一切見出されず、弥勒菩薩はドーム天井や方形組み上げ（ラテルネンデッケ）天井の中心に描かれるという違いがあるため、一概に同じ背景（例えば経典の内容や律による規定など）のもとに描かれたと断言することもできない<sup>6)</sup>。

千仏構成については、時代が下ると考えられる第189窟にバーミヤーンと共通する典型的なものが認められるが、より古いと考えられている石窟では千仏構成が一切認められない。こうした点にも、敦煌莫高窟との様式上の違いが認められるのである。

## V 敦煌および西域の美術とバーミヤーン

ここまで、バーミヤーン初期窟の壁画と、それに関連する周辺地域の仏教美術の様相を簡

6) 本稿で述べているような文様モチーフの共通性は、経典や律による規定、あるいは僧侶や画工集団の移動といった原因ばかりでなく、僧侶による絵解きなどに使用された絹絵・布絵、あるいは織物といった文物が交易品とともに移動することによって生み出される場合も多かっただろう。その場合、経典等を適宜参照しながら、それぞれの地域でモチーフを描く場所を決めた場合もあったと考えられる。

単に確認した。そこで判明したのは、ガンダーラ・カーピシー地域と敦煌周辺および中国西域に、バーミヤーン初期窟と共通したモチーフが存在するということである。

それでは、このガンダーラ・カーピシーの美術が北と東に伝播して、グプタ朝美術の影響をも受けながら、それぞれの地でバーミヤーン仏教美術と中国西域の仏教美術が成立したということになるのだろうか。すなわち両者は、ガンダーラ・カーピシーを源流とするいわば兄弟的な関係ということになるのだろうか。

残念ながら、このように考えるには多くの矛盾点がある。まず、バーミヤーンにはガンダーラで盛んに制作される仏伝やジャータカのような説話表現が、一切認められないという点が挙げられる。逆に中国西域ではキジル石窟などで豊富な仏伝図・説話図が描かれており、莫高窟でも選択的に仏伝等の説話が描かれ、ガンダーラおよびグプタ朝美術とのより密接な関係を想定することができる。

そして、もっとも大きな問題はその年代である。前章で検討した様々なモチーフのうち、千仏構成と交脚坐で冠飾をつけ水瓶を持つ菩薩は、バーミヤーンよりも確実に早い段階で、敦煌周辺においてすでに流行しており、その流行が460年以降の平城における雲崗石窟開鑿の際にも取り入れられているのである。このような特殊なモチーフが、源流を同じくするとはいえ、二つの地域で同時に、しかもセットで出現するとは考えにくい。それならば、より古い甘粛のモチーフが西へ伝わったと考える方が自然ではなからうか。

涅槃図についても、数ある仏伝の中から涅槃図だけが特別視されるにいたる過程が、特にキジル石窟において確かに観察されるのであり、その年代はバーミヤーン初期窟よりも早い可能性が高い。その場合、特に涅槃を重視するキジル石窟のモチーフがバーミヤーンに伝わったため、そこに涅槃図以外の説話表現がまったく存在しないという結果になったとも考えられる。

すなわち、ガンダーラ・カーピシー美術およびグプタ朝美術の影響を受けて、遅くとも5世紀半ばには成立していた甘粛および西域仏教美術の一部が西漸し、バーミヤーンの成立に大きな影響を与えた、と考えることも十分可能なのである。

## おわりに

以上、新たに提出された放射性炭素年代測定の結果から得られた、「バーミヤーンM窟およびJ窟群の壁画が、バーミヤーンでもっとも古く紀元500年頃に描かれたものである」という仮説の証明を試みた。その結果、この直前の時期（5世紀前半から半ば頃）に敦煌周辺および中国西域で流行していたモチーフがバーミヤーン初期窟と非常に近い関係にあることが判明した。すなわち、バーミヤーン仏教石窟の成立に際しては、東側からの強い影響が存在したと考えることで、放射性炭素年代測定の結果と美術史編年をある程度まで整合的に解釈できる可能性があるといえる。これらの絶対年代は今後の較正年代研究の進展で多少前後

する可能性も考えられるが、バーミヤーン初期窟よりも敦煌莫高窟最初期窟の年代が相対的に古いという事実は動かし難く、東から西へという影響関係は確実に存在している。敦煌莫高窟に認められるサーサーン朝的な冠飾表現が、455年以降しばしば認められるサーサーン朝の北魏への朝貢と関連してもたらされたと考えるにしろ〔桑山1977〕、エフタルによってもたらされたと考えるにしろ〔影山2006〕、同じルートを使った反対方向の文物の流れが想定されて然るべきであろう。

したがって、バーミヤーン遺跡群においては、6世紀前半までにはM窟やJ窟群のような小規模な仏教石窟がいくつか開鑿され、すでに細々と仏教が信仰されていた可能性が高い。さらに、6世紀半ば頃から大仏を作り出すほどに急激に発展し、7世紀までにはインド・グプタ朝の影響が一層強く伝わったとすることができる。

一方で、バーミヤーン初期窟のモチーフには、明らかにグプタ朝的なモチーフである日神・月神が存在しており、また中央アジア風の服装をした供養者の表現などもあわせ、そのすべてが東側からの影響で描かれたとは考えられない。また、涅槃図における摩耶夫人の登場も、敦煌では隋代に下がる事例ではじめて確認されるため、バーミヤーン事例の方が古い可能性が高い。石窟そのものについても、磨崖の中での位置が、最初に掘られる石窟として適当な場所であるのかという疑問や、J(g)窟に認められるスキンチ・アーチは甘粛や西域の石窟には存在しないといったことなど、検討課題は山積している。

今後は、中国西域の仏教美術の西漸という可能性を十分に考慮しつつ、こうした諸問題を検討する必要があるだろう。同時に、歴史学、考古学、仏教学といった諸分野での学際的な研究がこれまで以上に必要になってくるものと思われる。

〔付記〕本稿は、2007年11月10日～11日に金沢大学で行われた「第14回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」において口頭発表した内容に加筆修正をしたものである。発表後に多くの意見をくださった参加者の皆様に記して感謝する次第である。

## 図版出典

- 図1：中村2006の図174aを一部改変
- 図2：樋口編1983-84の第I巻Plate 11-3を一部改変
- 図3：樋口編1983-84の第I巻Plate 13-1を一部改変
- 図4：樋口編1983-84の第IV巻Plate 23を一部改変
- 図5：樋口編1983-84の第I巻Plate 70-2を一部改変
- 図6：樋口編1983-84の第I巻Plate 69-1を一部改変
- 図7：上 樋口編1983-84の第I巻Plate 11-3を一部改変  
中 樋口編1983-84の第I巻Plate 74-4を一部改変  
下 樋口編1983-84の第I巻Plate 33-5を一部改変



図8：肥塚，宮治編 2000 の図版 248 を一部改変

図9：敦煌文物研究所編 1980-82 の第1巻図版 12 を一部改変

図10：新疆ウイグル自治区文物管理委員会，拜城県キジル千仏洞文物保管所編 1983-1985 の第2巻図版 19 を一部改変

## 参考文献

- Godard, A., Godard, Y. et Hackin, J. (1928) *Les Antiquités Bouddhiques de Bâmiyân*. MDAFA 2.
- Grenet, F. (1993) Bâmiyân and the Mihr Yast. *Bulletin of the Asia Institute* 7, 87-94.
- Grenet, F. (2002) Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite Periods. In: Sims-Williams, N. (ed) *Indo-Iranian Languages and peoples*. Oxford, 203-224.
- Hackin, J. et Carl, J. (1933) *Nouvelles Recherches Archéologiques à Bâmiyân*. MDAFA 3.
- Hackin, J. (1959) Recherches Archéologiques à Bâmiyân en 1933. *Diverses Recherches Archéologiques en Afghanistan (1933-1940)*. MDAFA 8, 1-6.
- 樋口隆康編 (1983-84) 『バーミヤーン——アフガニスタンにおける仏教石窟寺院の美術考古学的調査 1970-1978年——』全4巻，同朋舎出版。
- 石松日奈子 (2005) 『北魏仏教造像史の研究』ブリュッケ。
- 岩井俊平 (2006) アフガニスタンおよび周辺地域の仏教寺院の変遷『佛教藝術』289, 100-112.
- 岩井俊平 (2007) 中央アジアの壁画の放射性炭素年代と美術史編年の比較『シルクロードの壁画——東西文化の交流を探る——』言叢社, 95-104.
- 影山悦子 (2006) エフタル式三面三日月冠の中国への伝播——陝西省靖辺ソグド人墓出土墓門浮彫から——。日本オリエント学会第48回大会 (2006年10月28日～29日) における口頭発表。
- Klimburg-Salter, D. E. (1989) *The Kingdom of Bamiyan, Buddhist Art and Culture of the Hindu Kush*. Naples & Rome.
- 肥塚 隆 (2000) グプタ時代の美術 肥塚隆，宮治昭編『インド (1)』(世界美術大全集 東洋編 第13巻) 小学館, 201-216.
- 肥塚隆・宮治昭編 (2000) 『インド (1)』(世界美術大全集 東洋編 第13巻) 小学館。
- 小寺武久・前田耕作・宮治昭 (1971) 『バーミヤーン——1969年度の調査——』名古屋大学。
- 窪寺茂・岩出まゆ (2006) 『バーミヤーン遺跡建造物調査中間報告書——石窟寺院遺構調査 2005年——』独立行政法人文化財研究所。
- 桑山正進 (1977) サーサーン冠飾の北魏流入『オリエント』20 (1), 17-35.
- 桑山正進 (1984) バーミヤーンに関する中国及びイスラーム資料『バーミヤーン——アフガニスタンにおける仏教石窟寺院の美術考古学的調査 1970-1978年——』第Ⅲ巻，同朋舎出版, 211-217.

- 桑山正進 (1985) バーミヤーン大仏成立にかかわるふたつの道『東方学報』57, 109-209.
- 桑山正進 (1987) 『大唐西域記』(訳注)(大乘仏典〈中国・日本篇〉9)中央公論社.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
- Le Coq, A. von und Waldschmidt, E. (1922-33) *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*. 7 vols. Berlin.
- 宮治 昭 (1977-78) バーミヤーン壁画の展開『佛教藝術』113, 3-27; 118, 13-47.
- 宮治 昭 (1983) 中央アジア涅槃図の図像学的考察 —— 哀悼の身振りと摩耶夫人の出現をめぐって —— 『佛教藝術』147, 11-33.
- 宮治 昭 (1984) 壁画および塑造の装飾美術に関する比較考察 樋口隆康編『バーミヤーン —— アフガニスタンにおける仏教石窟寺院の美術考古学的調査 1970-1978年 ——』第Ⅲ巻, 同朋舎出版, 176-210.
- 宮治 昭 (1985) 敦煌美術とガンダーラ・インドの美術『東洋学術研究』24(1), 51-75.
- 宮治 昭 (1988) キジル石窟 —— 石窟構造・壁画様式・図像構成の関連『佛教藝術』179, 43-69.
- 宮治 昭 (1989) キジル石窟の涅槃図像『美学美術史研究論集』7, 115-140.
- 宮治 昭 (1992) 『涅槃と弥勒の図像学 —— インドから中央アジアへ ——』吉川弘文館.
- 宮治 昭 (2002 a) 『バーミヤーン, 遙かなり: 失われた仏教美術の世界』(NHK ブックス 933) 日本放送出版協会.
- 宮治 昭 (2002 b) 『舎衛城の神変』と大乘仏教美術の起源 —— 研究史と展望 —— 『美学美術史研究論集』20, 1-27.
- 宮治 昭 (2006) バーミヤーン美術史研究と放射性炭素年代 山内和也編『バーミヤーン仏教壁画の編年 —— 放射性炭素による年代測定 ——』(アフガニスタン文化遺産調査資料集第2巻) 明石書店, 131-141.
- 中村俊夫 (2006) バーミヤーン遺跡の仏教壁画に関連するスサおよび木材の AMS による放射性炭素年代測定 山内和也編『バーミヤーン仏教壁画の編年 —— 放射性炭素による年代測定 ——』(アフガニスタン文化遺産調査資料集第2巻) 明石書店, 117-129.
- 中村俊夫 (2007) バーミヤーンの石窟壁画と2大仏の放射性炭素年代測定の研究 宮治昭編『ガンダーラ美術とバーミヤーン遺跡展』静岡新聞社・静岡放送事務局, 176-178.
- 中野照男 (1978) キジル壁画第二期の本生図『美術史』104, 112-126.
- マイケル・ベツェット (2005) イコモスによる大仏の破片の保存について 山内和也・青木繁夫編『バーミヤーン遺跡の歴史と保存 —— 国際シンポジウム「世界遺産バーミヤーン遺跡を守る」 ——』(アフガニスタン文化遺産調査資料集第1巻) 明石書店, 87-99.
- Rowland, B. (1974) *The Art of Central Asia*. New York.
- 定金計次 (2000) 古代絵画とアジャンター壁画 肥塚隆, 宮治昭編『インド(1)』(世界美術大全集 東洋編 第13巻) 小学館, 305-320.
- 新疆ウイグル自治区文物管理委員会・拜城県キジル千仏洞文物保管所編 (1983-1985) 『中国石窟キジル石窟』全3巻, 平凡社.
- 宿 白 (1983) キジル石窟の形式区分とその年代 新疆ウイグル自治区文物管理委員会・拜城県キ

- ル千仏洞文物保管所編『中国石窟 キジル石窟』第一巻, 平凡社, 162-178.
- 宿白(中川原育子訳)(1993) 敦煌莫高窟現存最初期窟の年代に関する問題 『美学美術史研究論集』11, 75-91.
- 田辺勝美(1972) 迦畢試国出土の仏教彫刻の制作年代について 『オリエント』15(2), 87-121.
- 谷口陽子(2006) 壁画の制作年代と下塗り層に含まれる薬草について 山内和也編『バーミヤーン 仏教壁画の編年 —— 放射性炭素による年代測定 ——』(アフガニスタン文化遺産調査資料集第2巻) 明石書店, 29-31.
- 谷口陽子・岩井俊平(2007) バーミヤーン遺跡の調査 宮治昭編『ガンダーラ美術とバーミヤーン遺跡展』静岡新聞社・静岡放送事務局, 171-175.
- Tarzi, Z. (1977) *L'Architecture et le Décor Rupestre des Grottes de Bamiyan*. 2 vols. Paris.
- 敦煌文物研究所編(1980-82)『中国石窟 敦煌莫高窟』全5巻, 平凡社.
- 王瀧(岡田健訳)(1988) 張掖金塔寺と敦煌莫高窟 —— 甘肅の早期二石窟に関する考察 —— 『佛教藝術』179, 71-86.
- 山内和也(2006) よみがえる仏教壁画 —— バーミヤーンN(a)窟 —— 『佛教藝術』289, 95-99.
- 山内和也編(2006a) 『バーミヤーン仏教壁画の編年 —— 放射性炭素による年代測定 ——』(アフガニスタン文化遺産調査資料集第2巻) 明石書店.
- 山内和也編(2006b) 『アフガニスタン流出文化財の調査 —— バーミヤーン仏教壁画の材料と技法 ——』(アフガニスタン文化遺産調査資料集第3巻) 明石書店.

(龍谷大学龍谷ミュージアム開設準備室)